

【タイトル・氏名】

西田宗教論にみる国家批判の論理

The Logic of Criticism of Nation in NISHIDA's Religious Theory

櫻井 欽 (Kan SAKURAI) (日本大学)

【発表概要】

西田幾多郎は最晩年の宗教論「場所的論理と宗教的世界観」(1945 年執筆)の終盤に国家批判の論理を組み込んでいる。例えば「民族が自己の中に世界的原理を宿し、歴史的世界的に自己形成的なる所に、真の国家があるのである」(10:360) \*として、ヤーヴェの宗教がイスラエル人の民族信仰から世界宗教に高められた例が挙げられる。あるいは論文の末尾では、鈴木大拙『浄土系思想論』を参照して浄土と娑婆との聯貫性・一如性が指摘され、「国家とは、此土に於て浄土を映すものでなければならぬ」(10:367) との一文で締め括られる。これらの箇所では、当為としての国家を掲げることにより現実の国家を批判する論理が読み取れる。周知の通り、同論文の執筆時期はアジア・太平洋戦争の末期に当たり、極度に言論が統制された状況にあったが、西田は日本国家の現実に厳しい批判意識をもっていた(1945 年 3 月 14 日、長与善郎宛書簡 (23:350-351) など)。

西田の宗教論は自己の根源に関わる思想として読まれる傾向があるが、本発表では、同論文に国家批判という意味での政治性を読み取り、戦時下の西田の国家をめぐる言説に位置づけて解釈する。1941 年の論考「国家理由の問題」では、「国家とは世界史的使命を担ふものでなければならぬ」(9:350) として、今日の時代は「歴史的世界自覚の時代」(9:355) として把握される。これに先立つ昭和天皇への「御進講草案 歴史哲学ニツイテ」(1941 年の御進講の草案)では、国家が世界史的性質をもつとは全体主義的であるとともに、単に個人を否定するのではなく、個人の創造を媒介とすることであるという(10:436)。宗教論においても、我々の自己を「創造的世界の創造的要素」(10:320) とする、個を媒介とする世界の自己形成が主張されており、宗教論にみる国家批判はこうした歴史的世界の理念による現実の国家への批判として解釈することができる。

\*新版『西田幾多郎全集』(岩波書店、2002-2009 年)の巻数・頁数を示す。